第Ⅱ群　座長のまとめ

奈良医科大学　耳鼻咽喉科
松　永　　喬

渡辺ら（鹿大）は自家考案の鼻腔・副鼻腔モデルを用い，レーザー・ドップラー法による鼻腔・副鼻腔気流動態の測定結果を報告した。鼻腔気流の主流は鼻中隔面より10〜20㎜外側にあるが外鼻孔から流入した壁面に近いところで呼吸の速さに無関係に存在する渦流が生じ，また鼻腔の下部より上部の方が流速が遅いなどの結果から加温・加湿・嗅覚などの鼻腔機能との関係を述べた。兵ら（京都市）は鼻・副鼻腔ネビュライザー療法において中鼻道に充分量の薬液を到達させるには呼吸流を乱流または捻転流にする必要があり，このため従来用いられている振動発生装置以外に非層流形成による乱流発生装置であるトヨタ自動車の「ヘリカル型吸気ポート」よりヒントを得られた自家考案の鼻孔アダプターの実験結果を報告した。このヘリカル型鼻孔アダプターを装着した超音波ネビュライザーによるメチレンブリュー溶液を用いた模型鼻腔分布では鼻腔全体に万遍なく散布され，とくに中鼻道・耳管入口部付近にも沈着し，また模型副鼻腔へのブドウ糖液を用いての浸入量も約15％増加するなど今後改良する点もあるが期待のもてる装置であると述べた。佐藤ら（帝京大）はネビュライザー療法に際し診療室内に残余エアロゾルが浮遊することによるアレルギー反応・過敏症の可能性を懸念し一般診療室内のクリーン化構想について述べた。被検者にマスクをかけてケイペラゾン溶液のネビュライザー療法を行ったところマスクに捕集された薬液量はその10〜20％であり，今後この残余エアロゾルによる診療室内外気汚染についても考えたいとした。林ら（三重大）は鼻汁の存在がネビュライザー薬剤の局所吸収にどのような影響を与えるかを double chamber 法を用い各種鼻汁を加えた家兎気管粘膜への抗生物質濃度の吸収率より検討した。慢性副鼻腔炎鼻汁を介しての抗生物質の吸収率は鼻汁の存在しない対照群と比べ有意に低値を示し，また N−Acetyl−L−cystein を加えた溶液は加えない溶液に比べ有意に吸収率の高値を示したことからネビュライザー療法を有効たらしめるには鼻汁の除去がまず不可欠であると述べた。北奥ら（奈良医大）は慢性副鼻腔炎のネビュライザー療法について中鼻道閉塞の有無および超音波式・ジェット式の機種差により有用性に差があるかをDKB溶液を用いて検討した。DKBネビュライザー療法の全体としての効果は著効５％，有効62％，やや有効20％であったが中鼻道非閉塞群の方が症状・所見とも改善例が多く，また超音波式の方が症状・所見とも改善例がやや多かったが総合判定では差はなかったと報告した。馬場ら（名市大）は鼻アレルギーに対するMSアンチゲンネビュライザー療法の有用性を placebo を対照とする多施設二重盲検比較試験で検討した。週２回，15回投与した結果，全般改善度，全般有用度で４週，８週とも placebo 群に比してMSアンチゲンの方が有用性のあることが確認されたと報告した。

本群はネビュライザー療法に関する鼻腔気流動態，有効性をたかめる鼻孔アダプター装置，残余エアロゾルによる診療室の汚染，鼻汁の有無によるネビュライザー療法の有効性の検討などの基礎的研究のほか中鼻道開存群の方が有効性がよいなどの臨床的研究が発表されネビュライザー療法の使い方について有意義な資料が提供されたと思う。